

赤ちゃんは 物をなめることで世界が広がる

赤ちゃんは首がすわり頭を自分の思い通りに動かせるようになると、一気に世界が広がり、「あれにさわりたい」「あっちに行きたい」と、次の発達のステップにむけての好奇心が刺激されます。

赤ちゃんの好奇心が外の世界に広がるのと同時に、赤ちゃんは興味をもったどんな物でも口の中に入れてたしかめようとします。口の中は感覚が発達しているので、知らない物をたしかめるのに最適な場所なのです。赤ちゃんが何でも物を口に入れるのは、私たちが目で見て触ってその物の情報を得ているのに対して、赤ちゃんは口に入れて舌を使って、物の大きさ、温度、硬さや感触などの情報を得るのです。赤ちゃんは舌で物の見分けをすることができるのです。これは共感覚といって、触覚刺激から受けた情報を視覚情報としても共有することができる能力で、この力が備わっているのは基本的に赤ちゃんの時だけで、赤ちゃんだけが持つ独別な能力なのです。共感覚は成長とともに消えていき、そのため大きくなると口に物を入れることがなくな

るのです。つまり、視力がまだあまりよくなく、物を自在につかんだり触ったりすることのできない赤ちゃんは、いろいろな物を口に入れることで、自分の舌を使ってその形を確かめ、情報を得ているのです。よっぽど汚い物、そして危険な物でない限り、いろいろな物を口に入れる行動はさせてあげましょう。赤ちゃんから幼児期に多い唾液は抗菌作用があるのですよ。でも、部屋を片付けて安全な環境をつくることは大事ですし、外遊びでも危険な物は口に入れないよう見守ってきたいものです。

今回はイヤイヤ期についてお話をさせていただきます。



めぐみ保育園 園長

弘田 恵子

めぐみ保育園園長。22歳で助産師になり、4年間高知の総合病院産婦人科でさまざまな出産に立ち会う。26歳から大阪府立母子保健総合医療センターのNICUで、6年間未熟児や障害のある赤ちゃんのケアをし、その後堺市で母乳育児相談室を仲間と開設。18年前から高知市内の保育園で、日々子どもたちと楽しく暮らす。助産師、看護師、保育士、幼稚園教諭(二種)。

